

叫べ、生きる、黒い肌で

作アサノ倭雅

シバーナ (ユニニス・ウエイマン) . . . (アフリカ系アメリカ人)
アーティスト シンガー・ピアニスト

ビリー・ハンズベリー . . . (アフリカ系アメリカ人) シバーナの親友 非暴力
運動家・SNCC

アンディ・ストラウド . . . (アフリカ系アメリカ人)
シバーナの旦那・マネージャー

コンラッド・ストラウド (コニー) . . . (アフリカ系アメリカ人) アンディ前妻の長男
非暴力運動家 SNCC

メアリー・ウエイマン . . . (アフリカ系アメリカ人) シバーナの母
メソジスト教会につかえる牧師

キャロル・ウエイマン . . . (アフリカ系アメリカ人) シバーナの弟

リチャード・フォレスト . . . (白人) 演劇 プロデューサー 非暴力運動家

サラ・ウエイマン 18歳 (白人とアフリカ系アメリカ人混血)
シバーナの娘

【現在 始まり 1986年】

1986年 1月20日 New York レストラン ハレルヤ

メアリー（アフリカ系アメリカ人）30歳が座って食事をしている。
キャロル（アフリカ系アメリカ人）が、メアリーの皿を取りに来る

メアリー「もうすぐよね」

キャロル「ああ、そうだね、みてこようか」

サラ・ウエイマン（18歳）が入ってくる

「人は、サラを見て止まり、メアリー立ち上がる
しばし見つめあう

キャロル「サラさん？」

サラ「はい」

キャロル「キャロル・ウエイマンです、ユニス、いや、サラさんのお母さんの弟、
母のメアリーです」

サラ「はじめまして。サラ・ウエイマンです。今日は、お忙しいところありがとうございます
います。どうしても、お聞きしたい事があります。・突然、ご連絡してすいま
せん。」

メアリー「（まじまじと見て）遠いところよく来てくれたわね」

サラ「今日は、もうお店は終わりですか？」

キャロル「ああ、明日パレードでしょ、準備があつてね」

サラ「あ、お忙しい中ありがとうございます」

メアリー「今になってキング牧師の誕生日が祝日になるなんてねえ。もう、18年だつ
て」

キャロル「キング牧師が亡くなってから18年ってこと」

サラ「あ、はい」

メアリー「あなたが、こっちにいるってことは、ユニスも帰ってきてるってこと？」

サラ「母は、フランスです」

メアリー「一人できたの？」

サラ「はい。オーディションを受けにきました」

キャロル「オーディション？なんの」

サラ「ミュージカルをやりたいんです、それで・行きたい学校があります」

キャロル「すごいなあ、女優さんかあ」

メアリー「あの子もね、こっちに帰ってくればいいのに、全く……」年も帰って来てないのよ」

サラ「母に、アメリカの学校に行きたいって話したら、ものすごく反対されて……」メアリー「じゃあ、ユニスはあなたがアメリカにいること知らないの？」

サラ「はい。どうしてもニューヨークでやりたいんです。それで……アルバイトしてお金をためて、オーディションを受けに来ました。あ、学校のオーディションです。」

キャロル「オーディションに受かったちゃえば、ユニスも、賛成するしかないよね」

サラ「そう思ってたんです……でも……落ちてしまいました」

キャロル「……座って……何飲む？」

サラ「あ……ありがとうございます。ミルクお願いできますか？」

キャロル「ミルクね待ってて」

キャロル去る

サラ「合否を見に行った帰りに、雑誌の記者だっていう人が、話しかけてきたんです」メアリー「記者？何を聞かれたの？」

サラ「分からないんです……その人に、私がシバーナっていう人の隠し子なのかとか、なんで私が肌が白いんだとか色々聞かれて……父は白人だって答えたら、父親は誰だか教えてくれて……」

メアリー「全く、そんなこと聞いてくるなんて……」

サラ「その人が言うには、母はシバーナという名前で、昔は有名な歌手だったけど、おかしくなって落ちぶれて、消えたって言われました」

メアリー「消えた？」

サラ「業界とアメリカからです。それで母は今何してるんだとか……」

メアリー「それを話したの？」

サラ「突然そんなこと言われても分からないので何も知らないって答えました」

メアリー「そうね、何かの間違えですよ」

サラ「……あの、本当に間違いなんでしょうか？私、そのあとシバーナっていう人を調べてみたんです。確かにいらっしやって1958年にレコードを出しています。」

他にも昔の記事を探してみてるんですけど……」

メアリー「そのシバーナという人が、ユニスだというの？」

サラ「はい。レコードを聞いて……母の歌声に似てるんです」

メアリー「そんな、似てる声の人はいるでしょ」

サラ「1969年に出した最後のレコードが、それがライブ中のなんです……最後の曲……」

その曲が母が、いつも私に歌ってくれていた曲だったんです。シバーナがライブ

中にこの曲を歌う前に話しをしてるんですけど・・・」

メアリー「そんなことまでレコードに入ってるの?」

サラ「はい。それが・・・この曲を歌う時はビリーと一緒にいつもいる。とても恋しい人なんだって話しています」

メアリー「・・・そうなの」

サラ「当時の記事を探して読みました・・・それで、シバーナは凶暴で客に毒をまき散らしたとか、愛人が沢山いるとか、国にマークされている要注意人物だとか書かれてるんです・・・私、信じられなくて。私の知ってる母は、そんな事をする人じゃありません」

メアリー「あの子は、今もピアノをやってるいるの?」

サラ「はい。ピアノを教えます」

メアリー「あの子には、ピアノぐらいしかないものね」

サラ「お願いします、知っていることがあれば教えてください。」

メアリー「私は知らない」

サラ「・・・。一つだけ・・・よろしいでしょうか?この曲を歌う時はいつも一緒にいるって・・・ビリーという人は・・・」

メアリー「え・・・あ・・・ううん」

サラ「母の恋人ですか?」

サラ「私の父は、ビリーさんという方なんでしょうか?父は死んだという事しか聞いてなくて」

メアリー「父親・・・あああ」

サラ「母に何度も聞こうとしたんですけど、話したくないようで、聞きたくてもきけないうできました」

メアリー「まあ、そうね、恋しい人って言うのも分からないでもないけど」

サラ「お願いします。父の事なんでもいいから知りたいんです」

メアリー「ユニスが、ビリーさんと初めて会ったのは、私達が New York にうつる1年前だから1953年くらいね」

サラ「1953年っていうことは、33年前、母は23歳ですか」

メアリー「あの子は、私に秘密で、お金の為にフィラデルフィアの、当時の私からみたら地獄みたいな酒場で働きはじめたの。あの子のピアノはあんな音楽の為のものではないのね・・・その時に、お客さんとしてビリーさんがお店に来たって・・・」

シバーナ(23)が、ピアノを弾き始める。その姿が浮き上がってくる。

音はそれがどんだん音が大きくなる。

音楽 (小フーガト短調)

嵐の音

【過去 出会い 1953年 4月4日フィラデルフィア酒場 ブルームーン】

黒人の酒場。こじんまりした店内に、テーブル席がやつほど、ピアノには楽譜がつんである。

ずぶぬれで入ってくるビリー(B) (傘またはコートを持つ)

ビリーは、ピアノを弾くシバーナに気づき、その姿に見入っている。

シバーナがビリーにきづく

シバーナ「あ……、ごめんなさい。今日は、もう閉店しました」

ビリー「ジャックは」

シバーナ「ジャック」

ビリー「このオーナー」

シバーナ「この天気ですので……もう帰りました」

ビリー「そ、バーボン」

ビリーは席に座る

シバーナ「あの……私は、電車が動いてなくて帰れなくて残っているだけで……」

ビリー「新人」

シバーナ「はい、3日目です」

ビリー「ああいう曲、ピアノ。ここではじめて聞いた」

シバーナ「ああ……あれは、聞かなかったことにしてください。大丈夫ですか、ふく物

おもちしますね」

ビリー「バーボンもね」

シバーナ「でも」

ビリー「いいから早く」

シバーナ「ああ、はい」

シバーナは、ふくものをもって、酒をもってくる

ビリーは、たばこを吸う。ビリー酒瓶で一気に飲み

シバーナ「リクエストはありますか・・何かピアノ以外で
ビリー」ピアノ以外？」

シバーナ「今日、オーナーに、見てくれもよくないんだし、ピアノ以外にも何かしろっ
て言われまして・・私、首になるのは困るんです」

ビリー「・・奇妙な果実を歌って」

シバーナ「歌、歌はやった事ありません」

ビリー「ジャックは、歌えればなんも言わないから。ああ・・それか踊る？」

シバーナ「踊り：ああ(ピアノの上につまれてる楽譜を探し)：：：。奇妙な果実・・」

ビリー「知らないの？ビリー・ホリディの」

シバーナ「これ・・」

シバーナ、(ビリーホリディの奇妙な果実)の楽譜を見て、歌詞の一節を、声に
出して 読み上げる

シバーナ「こんなことを・・」

ビリー「白人がき、黒人をリンチして生きてまま木に吊るしてる・・そんなことが当
たり前にそこら中で起こってるでしょ。この歌はね、聞いたらそういうことを見
ないふり出来なくなる、そういう歌」

シバーナ「誰かに聞かれたらどうするんですか」

ビリー「これは歌よ。あたし一回だけ本物聞けたの、ママがファンでき。彼女、ドラッ
グでボロボロで声も衰えたとか言われてるけど、そんなのはどうでもいい事だよ。
聞いてると分かんないけど苦しくなって、泣けてくんの。その時、白人も客席に
いて涙ぐんでた」

シバーナ「・・。他の曲でもいいでしょうか・・」

ビリー「ふ・・じゃあアイラブユーポギー」

シバーナ「アイラブユーポギー(楽譜見る)ああ・・でも・・歌はやってなくて・・」

ビリー「もう、アーでもぼーでもいいから声だせばいいでしょ。首になりたくないな
らやるしかないんだよ。ほら早く」

シバーナ歌う(アカペラ)

ビリー「あんたうまいよ」

シバーナ「私、首になりませんか？」

ビリー「首？何言ってるの？あんた、スターになれるよ」

シバーナ「スター？」

ビリー「あんたもなんか飲む？」

シバーナは取りに行く

ビリー「名前は？」

シバーナ「シバーナ」

ビリー「シバーナ、それ名前」

シバーナ「芸名です。本名はユニース・ウエイマンといいます。バレると大変なんで・・・」

ビリー「やばいことでもしたの」

シバーナ「母にバレたら大変なんです」

ビリー「母？それ何？」

シバーナ「ミルクです」

ビリー「ミルク」

シバーナ「母は牧師ですごく厳肅で」

ビリー「牧師？」

シバーナ「はい、だからこんな場所で働いてるって言ったら大騒ぎになるので」

ビリー「こんな場所」

シバーナ「お酒飲むような、こういうところに来る人たちは良くない人だし、音楽も、

偽物しかお客さんに望まれないので」

ビリー「あんた面白いね、音楽に偽物とかあるの」

シバーナ「聖歌とクラシック以外は偽物です。偽物は若者を神から引き離して地獄に

誘惑するんです、本当なら母に聞くのも禁止されてて」

ビリー「はああ・・・あたし教会なんていらないからさ」

シバーナ「教会に行かないんですか？それはいけない事ですよ。毎週日曜に・・・」

ビリー「嫌いなのもママが、最近教会にいきたがってて、困ってるどころ・・・で、

なんでここにいの」

シバーナ「クラシックピアノのレッスン受けたくて、レッスン代ってすごく高いんで

す。バッハの曲で今・・・」

ビリー「バッハ」

シバーナ「バッハは完璧なんです。波のうねりがどんどん大きくなって、そのうねりが、

いくついくつもあわさって行って・・・最後には嵐になっていく」

ビリー「へえ、それやれば」

シバーナ「無理なんです。大学に入れませんでしたから・・・母は、落ちたのは仕方な

いからあきらめて就職しなきゃって言うんですけど、私は、子供の頃からクラ

シックしかやってきてないし、カーネギーホールでのコンサートをする事だ

けしか考えてこなかったんです。急に就職っていわれても・・・」

ビリー「あたしのママは、14歳であたしを産んだの。相手がとんずらしたから、一人で

私を育てた。男ができては泣いてばっか。だからさ、子供の頃あたしが一番嫌なのはママが泣いてるのみることだった」

シバーナ「母は、これを持ち越えられる力を神様がくださったから感謝しろって、苦しみにたえれば天国にいける・・・」

ビリー「死んだら天国にいけるってやつでしょ。死んだ後にどうだとかあたし全然興味ない、でもママは天国に行きたいって・・・」

シバーナ「大丈夫ですか・・・」

ビリー「この店でさ、パパがピアノを弾いてたの。一回だけさ、パパのピアノを聞きにママと来たことがあるの、あの時、ママは凄く嬉しそうだった」

シバーナ「ここでピアノを・・・」

ビリー「ママが、癌だつて・・・さっき医者に聞いて・・・酒飲まないと・・・とびだしてきちゃった・・・ずっとママは一人で苦労して・・・ママの人生ってなんだったんだよ」

シバーナ「・・・」

ビリー「行かないや、支払いはツケにしといて」

シバーナ「はい。お大事になさってください」

ビリー去りながら

ビリー「ありがとう。来てよかった・・・またくるよ」

シバーナ「はい！あの！名前は」

ビリー「ビリー」

明かり変わる

音楽

人々が来て、シバーナに話しかけながら通り過ぎる。

ビリーがシバーナにシヨールをかける

司会者声「最後の登場は、ブルームーンの期待の星、シバーナ！」

音楽

拍手・歓声

シバーナは歌う

【現在 1986年 レストラン】

キャロルが飲み物を置いている

サラ「ビリーさんって・・・女性なんですわね！すっかり父かと・・・あの、母はやはりシ

バーナという名前の歌手だったんですわね」

メアリー「全くね・・・私に見つからないように変な名前つけて」

キャロル「変な名前って」

サラ「母は、ピアニストになろうとしていたんですか？」

メアリー「5歳の時に教会でね、讚美歌をねえ、いとも簡単に弾きだしたのよ。この子は神童だって周りから言われて、白人の奥様まで寄付をつのってくださって、この子なら、黒人ではじめてのクラシックピアニストになれるんじゃないかってね」

サラ「黒人ではじめての」

メアリー「はじめてよ」

サラ「母がそんなに凄い人だったなんて、ピアノは上手ですし、ピアノは教えてますけど・・・そこまですごいなんて知りませんでした。ビリーさんは、母の音楽の才能がすぐに分かったってことですか？」

キャロル「ビリーさんは、父親がジャズピアニストで、子供の頃から酒場に通ってらしいから」

メアリー「ユースを応援してくれるのはいいけどねえ、あの人は男の人をいつも連れてきてはお酒をおごらせていたらしいから」

キャロル「僕はね、ユースと一緒に、色々連れてってもらった」

メアリー「もうね・・・ユースは影響されてしまったね・・・でもうれしかったみたい」

サラ「それからずっと一緒にいたってことですか？」

メアリー「そんな事ないんだけどね。一年後、ビリーさんのお母様が亡くなってね・・・」

メアリー、立ち上がり明かりが変わり話し出す。

【過去 一年後の1954年1月 教会】

教会の鐘の音

シバーナ(24歳)とビリー(27歳)が出てきて立っている。
メアリー・ウエイマン(45歳)が祭壇にたっている。

メアリー「神を信じ、私をも信じなさい。私の父の家には、住まいが沢山あります。私の行く道はあなた方も知っています。トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう」イエスは彼に言われた。「私が道であり、真理であり、いのちなのです。私を通してでなければ、誰ひとり父のみもとにくることはありません。」
お祈りをささげましょう。

生命の源であります神様、ファニー・ハンズベリーは、45年の生涯を終えられ、あなたの元に召されました。ファニー姉妹のご家族は、南部のアラバマ州で農業をされていました。ご両親は、白人の農場で働いていましたが。お父様は、ファニー姉妹を学校に入れようとされて、白人にランチを受けお亡くなりになり・・・その後、ファニー姉妹はお母さまと二人で暮らしました。「14歳で妊娠・・・14歳?!」その後、娘のビリーさんを連れて北部に移り、女中をやるが、食べられなくて売春宿で働き、男にすぐお金持っていかれ、娘の大好きな本も勝手に売ったりする・・・娘と共に警察に・・・(黙読する)ええ、まあ、お嬢さんと一緒に厳しい人生を乗り越えてきました。

5年、という人生をまっとうし、永遠のふるさとに帰られました。いまやどんな痛みも苦しみもなく喜びに包まれていることを信じます。

イエスキリストのみなにより アーメン

ビリーとシバーナがいるところに、メアリーがくる

ビリー「ありがとうございます。ママは、ずっと教会にいきたがってたから・・・」
メアリー「ハンズベリーさん、その服装はなんですか?」

ビリーママが一番好きな服なの。この服を買うために、家賃滞納して・・・」

メアリー「葬儀というのはそのような服装はよくないのよ。あなたのお母さまは、墮落したお仕事をなさってたでしょ」

ビリー「ママを侮辱するのはやめて」

メアリー「そうではなくて、お母さまは、本来なら生きてるうちに悔い改めなくてはいいけないことだったの。あなたは、今からでも遅くないんだから自分がしてきたことを悔い改めなさい。あなたのために言ってるの・・・これからは・・・」

ビリー「あたし、教会が大嫌いな。あんたみたいなくそ婆や、くそ爺しかいないから。」

あたしが、昔いた教会はね、自分たちよりも貧乏な教会を馬鹿にして笑ってやがった。何が神様の使いだよ。あんたら言ってることって本当に神様がいつてんの?」

メアリー「なんてことというの、あたりまえです。こんな恐ろしい事を口にして、あなたは・・・」

ビリー「だったら、神様っていう奴は差別するくそ野郎ってことだ。あとは自分でやるんで、出ていって」

メアリー「悪魔に魂をもっていかれてるっていうのはこういう人間の事を言うの」

ビリー「出てって」

メアリー「ここは教会ですよ、あなたが・・・」

ビリー「ママがここにいるの、あんたにいてほしくない。友達と遊ぶからそれまでとにかく出ていって」

シバーナ「ママ、ご遺体があるのよ」

メアリーいきながら

メアリー「お前の友達だつていうからママは協力したの。でも、こんな人とは付き合うのは許しません」

メアリー、シバーナ去る

ビリー、一人でお棺の前にいる

シバーナは、走って戻ってくる

シバーナ「ごめんね、ママは・・・」

ビリー「ママは、いつも、あたしの事と、金の心配だけだった。学校いってないから文字もかけなかったし。でもね、あたしを育ててくれた」

シバーナ「凄いやね」

ビリー「ああああ・・・絶対抜け出してやる」

シバーナ「抜け出す？」

ビリー「この糞みたいな人生から。あとは仲間と埋葬するから。今日はありがとう」

シバーナ行こうとしてとまる

シバーナ「私も抜け出したい！」

ビリー「え」

シバーナ「こんな時になんだけれど、一昨日ニューヨークのエージェントから声かけられたの・・・まだママにも言わなくてずっと悩んでただけだ」

ビリー「声をかけられた？エージェントに？」

シバーナ「すぐにでもニューヨークにきてくれて・・・私ならレコーディングセッションも夢じゃないって」

ビリー「レコード！ニューヨークってカーネギーホールがあるニューヨークでしょ」

シバーナ「カーナギーホールがあるニューヨークよ、私行く、飛び込む・・・ビリーありがと」

ビリー「なんだよ、あああもう、おめでとう！」

シバーナ「ありがとう！」

～人は喜び合う

【現在 1986年】

メアリー「ユーニスはNew Yorkへ行くことになって、それから2人は会わなくなった。(立ち上がりながら) 私が話せるのはこれくらいよ。そろそろ教会に

いかないよ・・・また会いに来てちょうだい。(キャロルに)「ちこそうさま」

サラ「ありがとうございます」

メアリーは去る。キャロル見送る

サラ「すいません、母は、ニューヨークに行った後、何があったんでしょうか？お話を

聞いた限り、記者の人が言ってた事や、記事で読んだ事とは母は、全然違って・・・すぐくまじめで礼儀正しいように感じたんですが」

キャロル「僕も母と一緒にNew Yorkへ移った。そこで、ある出会いがあった、

凄腕マネージャー。彼のおかげでいきなりスターになった。アンディ・ストラ

ウド、ユーニス旦那だった人。あの時は、奇跡が起きたようだったよ。タウン

ホールでのコンサートの後、母の為に家も建ててくれて・・・あれは本当に驚いた」

サラ「・・・あの、アンディさんって・・・白人の方ですか？」

キャロル「黒人だよ。アンディさんは、すごいんだ、ユーニスをカーネギーホールにたせた」

サラ「カーネギーホールで母はクラシックピアニストとしてコンサートができたのですか？」

キャロル「クラシックではなかったけどね。カーネギーホールで1963年9月、オーケストラをバッグにユーニスは歌ったんだ！」

音楽がはいる (my baby just cares for me
またはbach)

【過去 1963年9月 カーネギーホール】

シバーナ声「ありがとうございます。カーネギーでコンサートをするのは、私が、5歳からの夢だったんです。

その場所でこんな素晴らしいコンサートが出来るなんて、それに母と弟が、そこに座っています。

皆さんのおかげです。これが最後の曲です。この曲は大好きなバッハの曲から生まれました」

口笛や歓声大拍手がきこえてくる。

【過去 カーネギーホール 楽屋 同時刻】

アンディ(42歳)は、パンをもっている。電話している

アンディ「ええ、はい。はい。今終わったところです。大喝采でした、アンコールが何度も、ええ、明後日の2時ああ、はい(手帳をだしながら・・・パンを食べる)かしこまりました。フェスへの出演、もちろん出ます。明後日シバーナもつれてうかがわせていただきます。はいそれでは、はい、はい。」

コニーが、くる(口元に傷がある)

アンデイ「コニー、ここに座れ(電話かける)なんだその傷は」

コニー「けんかだよ」

アンデイ「(コニーに) ひでえ顔だな。コニー、シバーナはもうすぐ大ブ레이크だ。アメリカ全土、ヨーロッパにもこれから進出するぞ。で、その面はなんだ、けんかは勝ったか」

コニー「勝ったよ、忙しいなら後で・・・」

アンデイ「いいか、お前には負けという言葉はない。あ、アンデイ、ストラウドでございます。はい、ご連絡してしまいました。ああきまりましたか！おおお(コニー決まったぞ、日本でのコンサート)もちろんです。レコード、アルバムをすぐに。はい、はい、よろしくお願いいたします。おおお」

コニー「用は何？」

アンデイ「どうだ・カーネギーホールは(カーネギーホールについてのうんちく話す)」

コニー「ああすごいよ・・・よく興行主がいたね」

アンデイ「いないから、俺が借りてやった！どうだ！」

コニー「借りたつて、カーネギーを？金は」

アンデイ「借りたに決まってるだろ。どうしてだ？え？必ずとりかえせるからだ！」

コニー「それならいいけど」

アンデイ「シバーナは、これから必ず大スターになる。それには話題性だ、新聞は白人しか載せない、だけどな、明日の朝刊にあいつは載る、ばばばんとな！何故だ？俺が頼んだからだ。いくらでかいレコード会社だつて簡単にはいかない、それが何故できるか？俺が白人に信頼されているからだよ。わかるか？お前の周りは、シバーナをなんていつてる、言ってみろ」

コニー「大学では、あの人のレコードをけっこう持つてるやついるけどさ」

アンデイ「あの人とはなんだ、このくそつたれ！シバーナはグラミー賞を毎年とれるほどの才能の女だぞ、食うか、でもこの後、会食だから腹はすかせとけよ、ステークキくらぞ」

コニー「会食？俺はいいよ、あのさ、終わってからでいいから」

アンデイ「これから忙しくなるから、お前は、このストラウド社で働け」

コニー「まだ大学があるよ」

アンデイ「大学はもう十分だろ。4年も留年しやがつてこのくそつたれが、どうせ仕事につけなきゃ大学なんてくそだ。俺は、大学なんて出てない、全て独学だ。他の黒人を見てみる。勉強が出来てもろくな仕事にもつけないで、家すら持てないクソが、不満ばかりほぎぎやがつて酒を飲んで薬中、くそばかりだ。だが俺はみる、

3階立ての家にキャデラック！」

コニー「仕事は自分で探すから」

アンデイ「いつまでもクソ南部にいて、何がある？農業でもする気か？土地を持てなき

や、あんなところ奴隷時代に後もどりだ」

コニー「農業だつてバカにならないよ。．．．とにかく自分の道は自分で考えたいんだよ」

アンディ、「コニー、これは命令だ、営業をやれ、シバーナをどんどん売り出せ」

コニー「あの人の為になんで俺が．．．」

シバーナ（33歳） 入ってくる

シバーナ「コニー！きてくれたの！今、忙しいんでしょ？勉強は．．．」

シバーナは、コニーにハグ

コニー「ああ、あ、ねえ、（こそこそと）いつものよろしく」

アンディはタオルを渡し、シバーナとアンディハグ。コニーみているが目をそらす。

アンディ「とつとと着替えろ、それは、太って見えるぞ、ああ、痩せて見えても黒いのはくそだ、パツとな華やかにいけ！」

アンディは手帳を開きながら、電話をしては、かけなおしている。シバーナはアンディにわたされたタオルで汗をふきながら

シバーナ「昨日も、挨拶にいったけど．．．」

アンディ「今日いらっしやるのは、オコナーさんだ、オコナーさんがいればヨーロッパでツアーができる。ジャズフェスの出演も、もれなくついてくる。いいか、今日

日は、失敗するなよ。何いわれてもニコニコしろよ。あとな、明後日のリハは中止だ、南部のツアーの為に、州知事にいっ挨拶にいくことになった、2時だ」

シバーナ「リハを中止って．．．」

コニー「南部のツアーってどこ？」

シバーナ「アラバマとテネシーと．．．」

コニー「向うは黒人の席は隔離してるし、聞いた話だと、黒人は出番まで外で待機するらしいよ」

シバーナ「外で待機！そんなの？」

テーブルにあるものを（雑誌、手帳、ボールペン・タバコ）投げるアンディ
アンディ「俺がゴーといったら決まりだ、黙って、さっさと用意しろ」

シバーナ、落ちたものを拾う

コニーは、落ちた雑誌をもつていこうとする

アンディ「おい！どこいくんだ、(雑誌をコニーから取りシバーナに渡す) ああ、これ
だほら！これを見てみる、シバーナは太ったと書かれてるだろこのくそやろう、
もっとやせろ、今日から飯を食うな」

シバーナ「食べるなって・・・」

アンディ「明日のコンサートが終われば、興行主、レコード会社から申し出が殺到だ。

でもな、見た目がデブじゃダメだ。プスでも痩せてればまだ。そういうもんだ」

シバーナ「デブって、お腹はどんどん大きくなるの」

アンディ「目立たないようにしろ」

シバーナ「目立ってきたら休んでいいってこと？」

アンディ「休む、休むだと、俺が砦つくくつてもつくくつても、すぐに次の奴がねらって
くるんだ、いいか、これは戦争だ。戦に休みがあるのか？コニー！着替えるぞ、こ
いー」

アンディ、コニーを連れて隣の部屋へ

メアリー・ウェイマン (55歳)、キャロ・ウェイマン (22歳) がくる

キャロル「ああー！いたいた、ユニス！おめでとう」

シバーナ「キャロル！」

キャロルとシバーナハグ

シバーナ、メアリーに近寄る

シバーナ「ママ、カーナギーホールの特等席はどうだった」

メアリー「椅子はそりゃよかったですよ」

キャロル「何いってんだよ、ホールに入った瞬間、涙ぐんでたじゃない」

メアリー「それは・・・こんなに素晴らしいホールに入れた事を神様に感謝していたの」

シバーナ「・・・」

キャロル「いやーすごいよーこんなところに入れるなんて、楽屋に入れるなんてき、特別だよ。

特別！ユニスは、ウェイマン家の誇りだよ」

メアリー「そんな・・・誇りだなんて、とても言えないでしょ」

アンディ、くる

キャロルが、アンディをつかまえる

アンディ「おお、よくきた」

キャロル「あああーアンディさん、白人の警備員につかまって、家族って言ってもしんじてもらえなくなれて・・・責任者を呼べて言われて・・・」

アンディ「そのジーザスはどこだ！」

メアリー「ジーザス」

アンディ「おおおメアリー、特等席はどうです？」

メアリー「もう、カーネギーホールにご招待いただけるなんて。あなたには、とっても感謝してるの・・・だけどジーザスはやめていただきたいわ・・・」

アンディ、シバーナを急かせながら出ていく。シバーナは衣装部屋へ行く
コニーはタバコを吸いながらでてくる

キャロル「コニーさん、きてたんですか！」

コニー「おおー！」

キャロル「コニーさん、ママの前でタバコはやめてください」

コニー「ここは教会か？」

メアリー「もう帰りましょ、お祈りの時間よ」

メアリーは出ようとする

キャロル「ユーニスが来てから行こうよ。お客様も喜んでたじゃない」

メアリー「何度もいつてるでしょ、こういう音楽は音楽じゃないの、よくもまあ・・・神様に背く音楽を人様に聞かせて・・・あの子は悪魔に魂を売ってしまったって教会でも言われてるのよ」

ビリー(36歳)が、はいつてくる。コニーはビリーを見てそわそわする。

ビリー「ああああーごめん」

メアリー「あああーすいません」

ビリー「あの一っこ、シバーナの楽屋ですよね」

キャロル「はい」

ビリー「ああもしかして、キャロル？でかくなってる」

メアリー「あの子のお知り合いですか」

ビリー「あの時、教会で・・・」

メアリー「まあ！そうでしたか。こんな音楽を聞かせてしまって、申し訳ありません」
ビリー「こんな音楽？シバーナは天才ですよ」
キャロル「そうですね」

シバーナ、衣装をもってくる

ビリー「シバーナ！カーナギーおめでとう！私、バーミングハムにいたんだけど、新聞
でみてさ飛んできたの、あんたのカーナギー・・・」

シバーナ「あの・・・ごめんなさい、どこかでお会いしました」

メアリー「ほら、信者さんですよ」

シバーナ「ああ・・・来ていただいてありがとうございます」

ビリー「シバーナ、きれいよ」

シバーナ「ビリー！ビリーなの」

キャロル「ビリーさん！」

シバーナ、ビリーに抱きつく

シバーナ「何その恰好」

ビリー「なにが」

シバーナ「その服はなに？化粧は・・・なんだか・・・」

ビリー「ああいいでしょ」

シバーナ「ああ、ビリー、ねえこれどっちがいい？（衣装をひつませる）ドレス黒はだ
めって言われて、これから人にあうんだけど、ママ、ビリーよ、ほら、お葬式し
た・・・あ・・・」

ビリー「あの時は母の葬儀を、ありがとうございました」

メアリー「え・・・お葬式・・・ああ」

シバーナ「ビリーこれどう？」

ビリー「うううん、もつとき、ばーとしたのなの？」

コニー「あの！すいません！」

シバーナ「あ、コニーよ、息子」

ビリー「息子？ああ・・・義理の息子。結婚したってなんかで読んだ読んだ」

握手（コニーはビリーの手を力強く握る）

コニー「コンラッド・ストラウドです。あなたのこと知っています。あの・・・バーミング
ハムの留置所のデモで・・・」

キャロル「バーミングハムのデモでキング牧師もつかまったんですね」

コニー「何いってんだ、キング牧師は、もう釈放された」

シバーナ「ビリーちょっといい？」

シバーナ、ビリー衣装室へ

メアリー「キング牧師って人は、ああやって騒ぎを起こしてテレビに出て目立ちたいだけなの、牧師のくせに全く」

コニー「ケネディ大統領が、テレビで公民権法案を議会に提出するって演説したのは、

あのバーミングハムでの・・・」

アンディくる

アンディ「コニー、ハムサンドがどうしたんだ」

コニー「なんでもないよ」

リチャード（白人・38歳）がくる。一同に緊張が走る。

リチャード「こんにちは」

アンディ「ああああ・・・リチャードさん・・・来ていただきましてありがとうございますいま

す！シバーナ！」

シバーナとビリーでてくる。ビリーとリチャード目があう

アンディ「ワナー・ブラザー社のリチャードさんだ」

シバーナ「はじめまして、シバーナです」

握手

リチャード「はじめまして、リチャード・フォレストです。本日は、御主人にご招待いただきました。バツハような美しい旋律が印象的でとても感動しました」

シバーナ「ありがとうございます。元々はクラシックなんです」

リチャード「ああ・・・だからですか・・・次はどこでコンサートされるんですか」

アンディ「次は6か月後に南部でのツアーが決まっています、特にアラバマでは大きく

やろうかと、シバーナは学生たちに人気があるものですから・・・」

リチャード「アラバマですか・・・どちらにお泊りですか？丁度向うにいたらご挨拶に伺

います」

アンディ「いや・黒人ホテルですのぞ」

リチャード「滞在先が決めまりましたらご連絡ください」

アンディ「ああ・はい」

リチャード「率直に申し上げますと、お申し出を頂いた件を、進めさせて頂くかと考えてるのですが、よろしいですか」

アンディ「あああああそうですね、それは、使っていただけということでもよろしいでしょうか」

リチャード「慎重にいかないと潰されかねない企画なんですぞ」

アンディ「潰されかねない」

リチャード「黒人作家の作品を、黒人を主演にし、オフブロードウェイで上演しようと企画しております」

アンディ「あああそうですね。映画ではなく、舞台ですか。それは、いいですね。その舞台にシバーナの音楽を！」

リチャード「昨上演されて話題になった黒人ではじめてニューヨーク劇評家協会賞を受賞した作家です」

アンディ「黒人ではじめて・・はあ」

リチャード「そちらにいらっしやるビリー・ハンズベリーです。」

全員ビリーをみる。ビリーお辞儀

シバーナ「作家!?!」

アンディ「これはこれは、失礼いたしました。アンディ・ストラウドです」

シバーナ「ビリーはフィラデルフィアにいた時の友達なの。旦那であり私のマネージャー」

ビリー「ビリー・ハンズベリーです」

アンディとビリーは握手

リチャード「今、黒人の真実の姿、直面している問題に焦点を当てる事はある意味で危険ではありますが、今や世界が注目している、この企画は必ず成功させます」

アンディ「はい」

リチャード「では、後程連絡します」

アンディ「はい、ご連絡をお待ちしております」

リチャード「ハンズベリーさん、ちょっといいですか・・あの事なんだけど」

ビリー「・・ああ・あの事ですか」

リチャード出ていく、ビリーついていく

【廊下】

ビリー、リチャード、ハグする

ビリー「ありがとう！嬉しい」

リチャード「彼女、ビリーの言う通りだった」

ビリー「すごいでしょ・・・」

リチャード「ああ・・・昨夜バーミングハム郊外で、kkkの集会が開かれたらしい」

ビリー「ジョージフォレストと、kkkはこないだもキング牧師が泊ってたホテルを、

爆破させたの。無事だったからよかったものの・・・」

リチャード「ワシントンの大行進への参加を街中で派手に呼びかけてるからだ。何か仕

掛けてくるぞ・・・また何か分かったらすぐに連絡する」

ビリー「ありがとう、ああ、すぐ帰らなきゃ」

リチャード「僕も月末には、そっちに行く」

ビリー「分かった」

【楽屋】

コニー「もう、ハッキリ言うよ、帰らないよ」

アンデイ「帰らないだと！」

キャロル「コニーさんは、公民権運動しているんです！」

コニー「キャロ・・・」

一同、静まる

アンデイ「運動だと」

メアリー「運動」

ビリーがくる

キャロル「コニーさんが、レストランの白人用の椅子に一日中座って騒ぎになっているのを、テレビで観たんです」

ビリー「あなた、学生非暴力調整委員会のメンバーなの」
コニー「はい」

ビリー「あたしもスニックよ、さっきのリチャードも」
コニー「えええ、そうなんですか？」

シバーナ「ちょっとビリーまで何？」

ビリー「今、闘争に参加してんの。それでスニックっていう・・・」

キャロル「スニックって各地を回って抗議運動してる・・・」

メアリー「キャロル！関わったらダメよ」

アンディ「おい！（全員黙る）さっきから何の話だ」

コニー「これは、黒人の権利を獲得する戦いなんだ」

アンディ、「お前は俺に嘘をついていたのか」

コニー「これは、みんなにとって大事な運動なんだよ。今こそ変革を起こす時がきたんだ」

アンディ、「変革だと！刑務所に入る気か？お前ひとりじゃない、家族も親戚も巻き込まれるんだ！」

コニー「毎日、毎日、あれはだめだ、あっちへ行け、ここに入るな、黒人用はむこうだ、

言われてきた。それを変えられるかもしれないんだ」

アンディ「いいか、今すぐにかえってこい」

コニー「帰らない！」

アンディはコニーの胸ぐらをつかむ

シバーナ「ああ！（シバーナ間に入って巻き込まれて）」

ビリー「シバーナ大丈夫、ちょっと」

アンディ「こい！お前は準備しとけ！」

アンディはコニーを連れて出ていく

キャロル「ママ、時間だよ」

メアリー「（時計を見る）ああーもう時間が過ぎてるじゃないの！ユーンズ、お腹をきをつけてなさい、冷やさないようね。いいわね」

キャロル、メアリー出ていく

ビリー「あなたは夢を叶えた、凄いよ」

シバーナ「バツハは弾けなかったけど」

ビリー「凄く感動した」

シバーナ「ありがとう」

ビリー「お腹って？もしかして・・・赤ちゃん？」

シバーナ「まだ〇か月。」年間ずっと出来なかったのよ。もう、いいと言われることなら何でもやった。半分あきらめてただけど・・・まさか出来るなんて！神様が授けて下さったとしたか思えないの！不思議なの、私、まだ会ってもいないのに・・・もうこの子が愛おしい」

ビリー「おめでとう」

シバーナ「ビリーは」

ビリー「さっきも話したけど、今、ニューヨークで、闘争中。今度、ワシントンで大行進をするんだけど・・・」

シバーナ「さっきの話、作家になったって」

ビリー「ああ、運動に賛同してもらう人を増やす為に、自分の体験を書いて出版社とかさ、いろんなところに売り込んだの」

シバーナ「凄じじゃない！」

ビリー「私ね、今が一番生きてる気がするの」

シバーナ「・・・」

ビリー「もう行かなきゃ」

シバーナ「バーミングハムにいるの？」

ビリー「そう」

シバーナ「私、6月に南部のツアーがあって、バーミングハムに行くのよ。アンディにお願いして会いに行くね」

ビリー「あ、じゃあここに連絡して。(メモ渡す) いくね」

シバーナ「うん、今日は来てくれて本当にありがとう」

〇人はハグ。ビリー出ていく

シバーナは、座り、自分の顔をみる。

おなかに手を当て赤ちゃんと話す。

シバーナ「赤ちゃん、ママよ・・・こんにちは、主よ、人の望み喜びよを弾くから聞いて」

ピアノを弾くように指を動かすと、音楽が流れてきて、シバーナは陶酔しどんどん世界に入っていく。

【主よ、人の望みのよろこびよ】

キャロル「ユーニスは、カーネギーホールでのコンサートが終わると、どんどん仕事が決まった。

〇か月後に南部でのツアーがあったんだけどね。あの時は、ワシントンの大行進でのキング牧師の演説に、黒人達の心は動かされ、ますます公民権運動が全国でさかんに行われていた」

【過去 座り込み運動】

音楽がはいる

座り込み運動の練習をしている

人々が走ってきて、壁にポスターを張る。「自由を今！」

ビリー「座込み運動は、我々が、白人と同じ料金を支払おうと、レストランで食事もできない、それに対し抗議をする運動です。これは、非暴力によって行われなくてはなりません。この抗議によって我々は、人間の悪を撲滅し、アメリカに変化もたらすのです。まず、レストランに入り、食べ物を買う。正当な客として白人の椅子で食事をします。白人に、追い詰められても、襲われようとも相手を愛すること。愛と非暴力のほかに 解決法はないのです。訓練開始する」

人々は、ポスターを、貼り終えると、コニーが椅子に座り、周りを囲む

コニー「すいません、食事がしたいんですが」

白人役①「お前を出す食事はない」

ビリー「白人役は、ニガーってよんで」

白人役①「・・・できません」

ビリー「心の準備をする訓練なの。ニガー！やって」

①「ニガーに出す食事はない！」

白人役②「ニガー！かえれ！」

白人③「でていけ！ニガー」

ビリー「もつと本気で心を砕くまでやるの、本番は、誰かが殺されるかもしれない。それでも平静でいれなきゃ、目的は達成できない。やって」

白人役①「どこに、ニガー用ってどこにかいてあるんだ」

白人役③「どけニガー！」

リチャード「さっさと移れニガー、立てよ！ここは白人に席だ」

白人役①「閉店だ、文字が読めんのか？」
白人③「アフリカにかえれ！ニガー！」

コニー、引っ張られ、蹴られ、殴られる
ビリー「交代！」

【過去 1933年 6月 30か月後 アラバマ州コンサート会場と、スニツクの
会議室が2か所を交互に展開される】

【アラバマコンサート会場】

拍手が聞こえてくる

シバーナはステージに立ち、茫然としている

司会者「シバーナ！に拍手を、アラバマによろこそ！」

シバーナ「……」

観客の拍手、口笛

シバーナ「こんにちは、今日は色々あって……混乱して……でも皆さんの為に演奏し
ます」

拍手

【アラバマ、スニツクの会議室 同時刻】

虫の声

ビリーとコニー、リチャードがはいつてくる。タオルで2人ともふきながら

コニー「あああ、あいつらにこんなに攻撃されて、愛するなんて難しいですよ」

リチャード「今日、参加者がすごい増えてた。それに、全国各地の図書館、映画館、白

人の施設で抗議運動がはじまっている」

ビリー「でも、犠牲が大きすぎる。今日も怪我した同胞がたくさんいたし……このまま
じゃだめ。暴力をゆるしておくなんて」

コニー「やりかえせっていうんですか」

ビリー「違う、暴力をさせないようにするの」

コニー「どうやって」

リチャード「州政府が機能しなくなるようにするんだ、それには黒人たちの選挙権が必要だ」

コニー「他のグループも動いてるけど、黒人は登録に興味なしですよ」

ビリー「今はね。家を一軒一軒まわる」

コニー「一軒一軒！そんなことしたらそれこそうちあかないですよ」

ビリー「この問題はそう簡単じゃないの・・・一人ずつ話を付けていくことが大切なの。」

(新聞見せる)「これ読んだ？」

リチャード「アメリカの為には、あと何回も葬式が必要だ。永遠に人種隔離主義を！」

ヨーシ・フォレスト。ああああ

コニー「そんなことを州知事が新聞で発言したらママの攻撃を許可してるっていつてるのと同じだろ、ジョージ・フォレストはkkkだろ、どう考えても」

ビリー「この州は、ジョージ・フォレストみたいな奴を選ぶ連中だけが、投票してるの」
リチャード「ジョージ・フォレストみたいなやつは知事からひきずりおろさなくてはならない」

ビリー「その代わり、黒人の州知事を誕生させる。それには黒人が全員投票しないと」
コニー「でもどうしたらいいんですか？黒人が、まったく聞く耳持たないのに」

【アラバマ コンサート会場・・・同時刻】

拍手・歓声

シバーナ「今日は・・・ありがとうございます」

ピアノに向かうがしゃがみ込む

ざわつきの声

アンディが来て、観客におじぎをし、ピアノの椅子につれていく

アンディ「ほら、立て、」

拍手歓声

コニー「動けないんですよ」

シバーナ「動けないの・・・」

アンデイ「観客にきづかれるだろ、ほら、笑顔にしろ」

コニー「登録するのに難しいテストをされるんです。文字もかけない人間がたくさんいるのに、わざと答えられない質問をしゃがるんです」

リチャード「今のままじゃ、登録できたって、皆投票しに行かない」

シバーナ「どうしてこんなことになったの、信じられない」

アンデイ「いいから演奏をつづけろ。何もなかった、何もされていない」

コニー「何をされるかわからないから恐れてるだけです。登録して職を失ったりママに襲われている人もいます」

ビリー「だからってあきらめるの？あたしき、白人より自分は劣ってるってずっと思ってた。こんな屈辱を受けてんのが、おかしい事だって分かってもなかった・・・黒人だってね

人間なんだよ」

コニー「でも、投票の前に、まず、座り込みにしぼって賛同者を集めいくほうが確実にす」

アンデイ「もう忘れるんだ、こうなったってことはそれでよかったと思え」

シバーナ「警察にどうしていかないの」

アンデイ「警察は向うの味方だ。何もしてくれるわけないだろ。いいな、余計な事をい
うな」

リチャード「警察は、女性だろうと黒人だったら平気で頭をふみつける。座り込みをする度に怪我人が出る」

ビリー「白人は黒人を殺しても刑罰を受けない、黒人もそれが当たり前だと思ってる。それって、投票する資格がないって思ってるのと同じなの」

コニー「でもどうやって黒人を集めるんですか」

ビリー「こんな屈辱を受けるのがおかしな事だって気づかせる」

リチャード「意識を変えるのは簡単じゃない、それは黒人にも白人にも言えることだ」

ビリー「皆の思い込みを変えていくには、一人一人話していくしかないの」

アンディ「こんなところで、終わらせるわけにはいかないだろ、これからなんだぞ、やっとアメリカ中にお前の名前がしれてきて、テレビ出演も決まった。・・いいか何もなかったんだ」

シバーナ「何もなかった。・私が襲われて流産しても、それでも何もなかった。・」

爆発音、火が燃える音

5人「うわー!」

コニー「なんだ」

コニー、ビリーは、いそいで出ていく。リチャードは一人残り考えている。灰皿を持ちタバコを吸う。ゆっくり出ていく

シバーナ「悲鳴」

アンディ「どうした!落ち着け」

ニュース声「ここで、通常放送を一時中断しまして緊急ニュースをお伝えいたします。人種分離の激しいバーミングハムで、二番通りバプテスト教会が爆破され、二人の子供たちがががを、十人の少女アンディ・メイ・コリンズ、キャロル・ロバートソン、シンシア・ウエズリー、デース・アクネアが死亡したことがわかりました。近頃、爆破事件が多発しています」

サイレン、救急車の音 人々の声

アンディがたすけてシバーナはホテルへ。アンディは、シバーナを座らせたら出て行く

【アラバマ・シバーナのホテル】

ノックの音

シバーナ「ドアのところに置いておいて」

ノックの音

シバーナ「ああ、もう置いていって聞こえなかったの」

シバーナ開けに行く

メアリーとキャロルが、ミルクとサンドイッチを持ち酒をもってはいってくる

メアリー「これをホテルの人に渡されたけど、このお酒はなに？どういふことなの、ユ

ーニスお前、もしかしてお酒を飲んでるの？」

シバーナ「それは・・・あれよ、アンディのよ」

メアリー「それならいいけど・・・ここにくるまで、あの爆発のせいで暴動が起こってて

タクシーが通れないくらい人だかりが、出来ててもう大変だったのよ、まだ1

4歳だって・・・4人もよ。かわいそうに、教会で祈りを捧げてきたけど・・・、

何か・・・ちゃんと食べてるの？これ食べなさい（もってきたサンドイッチとミ

ルクをだす）」

シバーナ「流産したって、知っていたの？」

キャロル「アンディさんが連絡くれた」

シバーナ「アンディは今日も接待。多分また帰りは朝方、あの人・・・私が、悲しんでて

もどうでもいいの。赤ちゃんの話もなかったみたいだし」

メアリー「何をいってるの、旦那様は、お前の為に働いてくれるの、感謝しないとだ

めよ」

キャロル「あんなにいい旦那さんがいてき、やっぱりユーニスは、神様に選ばれた人だよ。

昔から、みんなに期待されて注目されて・・・」

シバーナ「ああ・・・お願い・・・今日は一人でいさせて」

メアリー「聞きなさい。ママはね、やっぱりお前がやってる音楽がいけないと思うの」

キャロル「ママ、今はその話は・・・」

メアリー「あの音楽は悪魔の音楽なの。だからこういう事になるのよ。神様はいつも見

ていらっしやるの・・・いつもいってるでしょ」

シバーナ「私は働いてママにお金渡してる。大きな家も建てた。ママが悪魔だっていう

音楽で稼いだお金だけだね」

メアリー「・・・」

シバーナ「そうじゃなくて・・・」

キャロル「ママ、行こう。明日もユーニスは仕事なんだし、休ませてあげないと。それ

にもうお祈りの時間になる・・・ほらいこう」

メアリーは、キャロルと出ていく。

シバーナ、酒に手をのばす。酒を飲む

激しいノックの音

シバーナ「うるさいな」

ビリー「シバーナ、いるんでしょ」

ビリー勝手に入ってくる。

シバーナ「ビリー！」

ビリーに抱きつく

ビリー「あああ！あんた、ちょっと！飲んで大丈夫なの？」

シバーナ「私も飲めるようになったのよ。いそがしいのに電話してごめん」

ビリー「・・・あんたのミルクもあるじゃない」

シバーナ「・・・」

ビリー「ミルクみるとき、あいつ思い出すんだよね。あんたのことを、薬中だったって言いふらしてた・・・」

シバーナ「あああ、私が、こうやって目をとじて演奏してるから。(シバーナやる)その白い飲み物はいったいなんの薬なんだ！って聞かれて」

ビリー・シバーナ「どうみてもミルクだろう」

ビリー「大丈夫？」

シバーナ「・・・誰にもいわない？・アンディには、言うなって言われてるんだ・・・」

ビリー「何かあったの？」

シバーナ「・・・ああ・・・何でもない」

ビリー「・・・これは誰にも話したことないんだけど・・・私、12歳の時に、白人に強姦されたの」

シバーナ「12歳・・・」

ビリー「白人の家を掃除して小銭をかせいでたんだけど、その家の旦那様に犯された」シバーナ「・・・」

ビリー「白人の強姦なんて、周りを見れば当たり前だし、仕方なかったって忘れようとしたけど、今もあの時のことが残ってる・・・黒人の娼婦だってね強姦されるのはごめんよ・・・今ならわかる、仕方ないなんて思わなくてよかったの・・・そうでしょ」

シバーナ「・・・私・・・ホテルの前で襲われそうになったの。アンディと出掛けよ

うとした時、物音がしたから振り向いたら、白人の男が〇人がいて、びっくりして逃げようとして勢いついて倒れたの、アンデイが拳銃をもってたから助かったけど……脅迫電話があったの。コンサートを中止しろって……」

ビリー「なんでその〇人は、あなたの滞在場所を知ってるの？」

シバーナ「わからない。すぐに病院に運ばれて、そのあとすぐに、コンサートで歌わなくちゃいけないって……アンデイは、この件はなかったことにしろって……」

ビリー「なかったことにしたら絶対ダメ」

シバーナ「もうどうでもいい、あの子はもういない……もういないの……ママは私が、悪いんだって、それしか言わない、いつもそうよ……ピアノさえあれば、落ちてくんだけど……バツハを弾くと気持ちが落ち着くの」

ビリー「あなたの、バツハね」

シバーナ「クラシックピアノにストになれてたら、私はもっと幸せだったのに」

ビリーはシバーナを支える

ビリー「ね、あんたが、クラシックピアノにストになれなかったのはなんで」

シバーナ「それは……神様が才能を授けてくださったのに……たまにね……練習ばかりじゃなくて私……友達と遊びたいって思ってた……周りでクリスマスをやっている私も毎日……時間の練習がある……ママにも家族にも、周りの人にも、全てにイライラして」

ビリー「それはイライラして当然よ」

シバーナ「そういう気持ちになるのはいけない事なの……だから落ちたのよ、それに赤ちゃんも……」

ビリー「そうじゃない、落ちた理由は、あんたが黒人で女だから。黒人で女であることは、あんたは悪くないでしょ」

シバーナ「悪いの、私は神様に忠実であろうとずっと努力してるのに、でもどうしようなく、憎しみとか、怒りがわいてくる、一人でいるとね、大声で叫びたくなるのよ、自分が分からない、私への神様からの罰よ。あの子は私のせいで死んだの……」

ビリー「(聞いて) 3日前の教会の爆発で、4人の女の子が亡くなった……知ってるでしょ」

シバーナ「うん。同じ日にあの子もいなくなったの……」

ビリー「あの子たちは、神の家で聖書を勉強していたのよ、神への感謝がたりなかったの？あの子たちに罪がある？そんなわけない。あの子たちは黒人だから殺されたの。」

私達大人が、人間としての自由と尊厳を求めたから、その犠牲になったの。

ここに来るまでに、白人の子供たちが、あの事件のお祝いしてた。それがどういう

ことか分かる？

あたしたちのいる、アメリカって国はそういう国なの、あんたのせいじゃない」

シバーナ「……」

アンディがくる

アンディ「帰っていただけですか」

ビリー「……シバーナ、いつでも連絡して」

アンディ「お帰り下さい」

ビリーさる

シバーナ突然立ち上がりビリーを追いかけようとする

アンディ「！あのくそ女に施されるな、あの教会の爆破の件には関わるな」

シバーナ「死んだ子が、私達の子供だったら、そんな風にいえるの」

アンディ「いないだろ」

シバーナ「いたでしょ？3日前まで」

アンディ「……」(ひるむ)

シバーナ「襲われて……私の赤ちゃんが……」

アンディ「子供については無理する必要はないってことだ。お前はこれから忙しくなる

し、子供にとってもよかったかもしれないだろ、」

シバーナ「いなくなつて、よかつたっていうの？」

アンディ「仕方ないだろ、忘れるしかないだろ」

シバーナ「仕方ない？私は嫌！ここにいたの！忘れるなんてできない！あの子は、もう

かえつてこないのよ」

アンディ「落ち着け！今、いけば、明日のコンサートは中止だ。この、コンサートはジ

ョージフォレスト州知事に支援をたのんだ言っただろ」

シバーナ「あんな奴」

アンディはシバーナをつかむ

アンディ「言葉に気をつけろ、白人を否定するな。ここは南部だ」

シバーナ「なぐれば。さつき、見えたの。このアメリカっていう国がどういう国か、私

たちがどういう存在なのか。私はずっと死んでいたの。なんで、私を人間とも見てない連中の為に演奏しなくちゃいけないのよ。音楽は私の魂よ」

アンディつかむ

アンディ「お前の安全の為に俺がどれだけ動いてると思ってる。それにな、白人の力が必要ならば、こんなツアーができるわけないだろ、どうやって・」

シバーナ、アンディの拳銃を取り上げ構える

アンディ「おちつけ、お前は・何する気だ」

シバーナ「黒人の子供を平気で殺す連中をみんな、殺してやるのよ」

アンディ「おちつけ、いいか、お前に殺しは無理だ。拳銃はあつかえるはずないだろ！お前は音楽しかできない。とにかく落ち着け、いいか！落ち着くまでここをでるな、いいな」

アンディ逃げるように去る

シバーナは興奮したまま、拳銃を持ちながら、五線譜に向かい作曲する
(心の中からほとぼしる。すごい勢い)

音楽が聞こえてくる

【イメージシーン シバーナのバッハ】

拍手歓声の中、シバーナ客に応えている。

キング牧師の演説や、暴動も声が聞こえてくる

音楽 バッハ・ピアノ協奏曲第一番二短調

シバーナ「これなのよ！

ずっと自分のやってる芸術に不満だった。

だって、クラシックに比べて、観客は音楽なんてわかってない連中ばかりだし。

でも、今はそんなことはどうでもいい。

メロディーが心からふきだしてくる！

何か自分に魂が下りてきているよう。そう、まるでバッハのよう！

それに観客！すごく尊敬できる人達。

彼らは、同胞の為に、身をささげ行動している。

そこには心かよう連帯感がある」

ビリー「これは自由を求める闘い。民族の歴史的な瞬間に私たちは参加しているの」
シバーナ「私は重用な目的の為に音楽をささげている」

ビリー「シバーナの歌にアメリカ中が衝撃受けてる」

シバーナ「アーティストとはそうあるべきなのよ。新しい意識が広がっていく。同胞の為に音楽がどんどん生まれる」

ビリー「シバーナは、音楽であたし達の思いを代弁したの」

シバーナ「南部からは、二つに割れたレコードがラジオ局から戻ってきたの。これが入ってた」

ビリー「(読み上げる) 神を冒瀆した音楽だ、シバーナに神の呪いがあらんことを」

〜人笑う

メアリー「コロサイの信徒への手紙、第③章②節、奴隷たち、何事につけ、肉による主人に従いなさい。きにいられようとして、うわべだけで仕えるのではなく、主を畏れる者として真心を込めて従いなさい」

シバーナ「神よ、この音楽で呪われるなら、呪えばいい！」

リチャード「シバーナの歌に対して、白人至上主義者たちは怒り狂っている」

メアリー「創世記第⑥章第②節。神はヤフェトの土地を広げ、ヤフェトはセムの天幕に住み

カナンはその僕となるように」

リチャード「白人の子供は、差別は神の教えとして聖書に書いてあると教わる。白人たちは、シバーナの歌を呪う」

コニーがくる

コニー「黒人を奴隷にする為に、白人にとって都合がいい、神の言葉を教えられて先祖は操られてきたのだ」

メアリー「エフェソの信徒への手紙第⑨章①節、奴隷たち、キリストに従うように。恐れおののきつつ、真心をこめて、肉による主人に従いなさい」

全員「従わない」

シバーナ「神は音楽をつくった、音は全てのはじまり」

コニー「アフリカ！アフリカの大地よ」

ビリー「黒人のルーツ。誇りある民族」

シバーナ「人類の鼓動、リズム、歌、躍動」

〜人「ブラックパワー！」

コニー「シバーナこそ、公民権運動の為に闘う真の歌手だ！」
ビリー「シバーナこそ、*Swing*パワーを象徴する音楽の守護天使である！」

拍手、歓声

シバーナ「私の音楽は、自由を求める同胞達の叫びなの」

☆拍手歓声！

人々「自由を今！自由を今！平等をもとめる！」

【現在 1986年】

サラ「母は、流産したってことは、どういう事・・・」

キャロル「僕も詳しくは知らないんだ・・・、アンデイさんなら・・・」

サラ「アンデイさんに、お会いできるんですか？」

キャロル「ああ、連絡とってあげるよ」

サラ「ありがとうございます、お願いします」

【現在 アンデイの家】

アンデイ「シバーナの娘だと？ここに・・・何しにきた」

サラ「母の事で何でも知っていることがあれば教えていただけませんか？」

アンデイ「あの女の話などしらん」

サラ「あの、私は母の子供ではないのかもしれない・・・」

アンデイ「読んでみろ」

アンデイは新聞をみせる

サラ「(読む) 行方不明であった、歌手シバーナには隠し子がいた。シバーナには白人

との間に隠し子がいて今アメリカで、ミュージカルの学校を受験・・・これなんで・・・」

アンデイ「この隠し子ってのはお前の事だろー！」

サラ「隠し子？」

アンデイ「あいつは、他に男も沢山いたから、隠し子がいようと別に驚かん。だがな、

隠し子がぬけぬけとよくも・・・このくそ野郎が！お前らのせいで俺の計画は

台無しになったんだ！いくら借金したとおもってたんだこのくそが！さっさと

と帰れ！」

コニーがくる

コニー「親父！やめろ・・・なにやってんだ！」

コニー「誰？」

アンデイ「シバーナの隠し子だ」

サラ「申し訳ありませんでした」

サラ去る。コニー、サラをおいかける

コニー「もしかして・・・サラさん」

サラ「はい」

コニー「下院議員のコンラッド・ストラウドです（名刺渡す）」

サラ「コニーさんですか？」

コニー「はい、先ほどは父が申し訳ありません」

サラ「私こそすいません。知らなかったので・・・失礼なことを・・・」

コニー「シバーナはフランスにいるの？」

サラ「はい。私、母の反対を押し切ってアメリカに来たんです。それが・・・こんなことになるなんて」

コニー「新聞を読んだよ。今さらシバーナの事が記事になってるから、まさかとは思ってたけど・・・」

サラ「だから母は私に知られたくなくて、自分の過去を私には教えてくれなかったんです。

父は誰かもわからない母の愛人の子供だったから」

コニー「それは・・・」

サラ「帰ります」

コニー「フランスに帰るの？」

サラ「わかりません・・・ママのことももうわからなくなりました」

コニー「マスコミってやつはあることない事書く連中だ」

サラ「嘘なんですか？」

コニー「・・・」

サラ「真実を教えてください」

コニー「・・・。私たちが公民権運動をやっていた頃、シバーナの歌のおかげで、多くの人間が公民権運動に関心をもちはじめた。本人もすごい入れ込みようだった。ツアーをやりながら、集会やら抗議運動にも時間が許す限り参加しにきてたしね。ビリーさんがいたっていうのもあるだろうけど」

サラ「運動に母もビリーさんと参加したんですね」

コニー「・・・今考えると、はじめりは、あの頃かもしれない。

1964年、「月、ジョンソン大統領は、「全ての人間は平等に創造されている」と言って、公民権法が制定された。この法律によって全ての州で、人種分離がなくなった。次は、選挙権を獲得する為に私たちは動いていた」

【過去 セルマ 1965年 一月 アラバマ州】

リチャードがいる。リチャードは、酒瓶を持ち飲む。テーブル上のスケジュール帳を読む

リチャード「・・・」

ベリーがくる。リチャード慌てる

ハグする（リチャードはいつもと違う）

ベリー「なんかあったの？」

リチャード「・・・なにが」

ベリー「酔ってるの、はじめてみた」

リチャード「そうだけ。オフブロードウェイの上演決定おめでとう！」

ベリー「ありがとう」

リチャード、酒を渡す。～人乾杯

リチャード「キャストイングも楽しみにしてて」

ベリー「うん」

リチャード「ああ。今日の集会の後、会える」

ベリー「今日決まれば」

リチャード「テレビ局を呼ぶって話」

ベリー「そう」

リチャード「ベリー、俺は反対だ」

ベリー「なんで？選挙権のために、私達は毎日行列をつくって訴えてる。ジョージ・フ

オレストはひどすぎる」

リチャード「州政府がひどいのはわかってる、だが・・・」

ベリー「爆破事件も相次いで、同胞の中で、暴力には暴力でかえせってという意見が強くなってきたの」

リチャード「暴力に暴力で返せば、相手の思うつぼだ」

ビリー「だから、それを抑える為もあるの……このままだと暴動になりかねない」
リチャード「ああ」

ビリー「これが成功すれば、世界中からアラバマが注目される。そうすれば大統領が黙
つてられなくなる」

シバーナがくる。

シバーナ「ビリー！」

ビリー「ああ」

〽人はハグ

シバーナ「おめでとう！」

ビリー「ありがと……よくこれたね」

シバーナ「少しの時間でも来るに決まってるでしょ、リチャードもきてたの」
リチャード「ああ、今きたとこ」

〽人ハグ

シバーナ「もう、できる事なら、しばらくここにどどまりたい……でもアンディが、次々
と仕事をいれるから……」

ビリー「次はどこいくの？」

シバーナ「ロス」

ビリー「ロス！ロスであんたが歌えば、また賛同者が増えるね」

リチャード「ああ、シバーナは公民権運動になくはならない存在だ」

シバーナ「でも信じられない、堂々とレストラン座れるのよ」

ビリー「あだし、暇さえあれば座りにいってる。昨日は4回、今日も朝からコーヒー飲
むだけに座りに行って……」

シバーナ「わかる、私も通りかかると寄りたくなっちゃう、こないだなんてトイレで白
人と会ってお互いにびっくり……あ、……ねえこれ、台本？」

ビリー「そう」

シバーナ「どんな話なの？」

ビリー「秘密」

シバーナ「何？リチャード知ってるの？教えて」

リチャード「シバーナの話だよね」

シバーナ「え、私?・・・私の事?ほんとに・・・」

ビリー「これが出来たら、アメリカ中の若者に観てもらいたい」

シバーナ「(読む)これ」

ビリー「それは序文」

シバーナ、読む

シバーナ「凄くいい!ね、これにメロディーつけていい?」

ビリー「これに」

シバーナ「これなら、誰でも口づさめるかも。いい?(歌う)」

ビリー「これさ、アメリカ中の子供たちが、歌ったら世の中変わるよ、ね」

リチャード「ああ、すごくいい」

シバーナの歌に感動しているビリーとリチャード、

コニーがくる

コニー「決まりました!」

ビリー・リチャード「きまった!」

コニー「3丁目の大宴会場も借りれました」

シバーナ「何?」

ビリー「テレビの全国放送で、アラバマの実態を話すの」

シバーナ「ビリーが?」

ビリー「地元の人」

リチャード「地元の黒人に話しをさせるのか」

ビリー「皆話したがってるの」

コニー「この州で有権者登録したらどういう目にあつたかという体験をあらがいに話してもらいます、政府が白人の暴力を認めるって言うならこっちもやってやりませう」

リチャード「こっちもやってやるとはどういう意味だ」

コニー「この州の白人警官どもは、黒人を叩き潰すことしか考えてない、あいつらまるでヒトラーですよ!」

キャロルがくる

シバーナ「キャロル?」

キャロル「・・・リチャードさん電話だそうです」

リチャード「電話？」

リチャードでていく

シバーナ「キャロル、どうしてここにいるの？」

コニー「うるさいから、文句いうなら一度参加してみろって呼んだの」

キャロル「ユーニス、僕……。今、コニーさんと一緒に、レストランに座ってホット

ドッグを食べてきた！……レストランで堂々と座れるなんて……こんな事だったなんて……」

ビリー「キャロル、あんたも参加する」

キャロル「僕、徴兵されました！」

全員「え……」

シバーナ「ママは知ってるの」

キャロル「ママは誇りに思うって。国の為にお役にたつてきます」

ビリー「あんた、ベトナム戦争の事わかってるの」

キャロル「わかってます、アメリカにとつて大事な……」

シバーナ「何をいつてるの、あんたは騙されてんの国の為だっておもいこまされてるだ

けよ、私が行かせないように何とか……」

キャロル「僕は行きたいんだ！ユーニスにはわからないよ。ずっとうらやましかったよ、

僕は何もないから。ママは、人をうらやむのは悪い事だっというから、そう思わないようにしていただけだよ。いつてきますー！」

キャロル、去る

銃声

【過去 ストラウド社】

アンディ「このくそやろう！ロスのコンサートが断られた？何を言ってるんだこのくそ

が！邪魔をされてるだど？誰に邪魔されてるんだ！調べろ、くそ野郎！なんだと！もういつつペンいつてみる！アレサフランフルトだかフルクリンだかしらない奴なんかよりシバーナはいける！わかったか！」

電話がなる

アンディ「またキャンセルか？このくそが！泣いてちやわかんねーだろ、シバーナなんだ・・・キャロルと話してたら・・・話してたらなんだ・・・おお、コニーどうした、何があったんだ・・・キャロルが撃たれただと・・・肩をかすつただけですぐに退院できる・・・シバーナとにかく伝えろ、キャロルを連れてすぐに戻ってこい！」

電話切る

アンディ「キャロルが狙われただと・・・くそが、シバーナをねらいやがったな・・・」

【現在 アンディの家の近くの公園】

サラ「その曲、母が私に歌ってくれていた曲です！」

コニー「その曲？ああ、シバーナとビリーさんで作った曲のこと？」

サラ「はい。こんな風につくられた曲だったなんて知らなかった・・・」

コニー「あの頃、あの歌は、一気に広まってね、黒人たちがみんな口づさんでた

・・・キャロルは怪我が治るとすぐにヴェトナム戦争にいったよ。シバーナも周りも必死になんとかしようとしたんだけどね。ヴェトナム戦争は泥沼化していて何万人という黒人がヴェトナムに送り込まれていた」

サラ「そうですね」

コニー「そんな中、私達は、セルマからモンゴメリーまでの大行進をした。それによって、1965年、ジョンソン大統領の署名によって投票権法が成立した。だけどね、必死に求めた選挙権を手にいれても、簡単には世の中は変わらなかった。私とシバーナは、非暴力闘争を反対する、過激グループと行動するようになっていった」

サラ「母もですか？」

コニー「シバーナは、キャロルの事で相当まいていたし、毎日のように爆破事件、葬式は相次いで：私達、若者は非暴力なんて生ぬるいと思えなくなっていた。そして、2年後の1967年に問題が起きた」

【過去 1967年 野外のコンサート会場】

シバーナ（37歳）が客の前で話している

音楽

シバーナ「みんな聞いて、ベトナムへの徴兵制度それ自体を拒否、反対するのよ！」

人々「そうだ！」

シバーナ「ベトナム戦争は、アメリカの恥よ！黒人は騙されてるの・・・腐ってるアメリカは腐ってる、正義だ、国の為だっておもいこまされてるのよ！」

シバーナ「あたし達は、黒人の州を持つしかない、武装革命を起こせば独立した州をつくれるのよ。黒人の州をつくるの！いい！素晴らしい限り自由はこない！」

人々「いえーい」 拍手！

シバーナ「みんな準備はできてる！黒い神の怒りを呼び覚ます覚悟はできてる？」

人々「いえーい！」

シバーナ「白い悪魔を潰すの！白い悪魔を亡ぼすのよ、

向うがくるならこっちも殺す覚悟をもって！非暴力なんて、負け犬がやることよ！旧約聖書の時代がきたのよ！」

歓声 拍手

【過去 1967年 ビリーの家の近くの公園】

ビリーとリチャードが来る

ビリー「・・・」

リチャード「・・・」

ビリー「・・・子供ができたの」

リチャード「子供・・・」

ビリー「うん」

リチャード「いつ分かったの」

ビリー「3日前」

リチャード「ビリーは言われたときどう思った」

ビリー「驚いた。この歳だしね」

リチャード「・・・」

ビリー「でも、あんたの子だからうれしかった」

リチャード「そう」

ビリー「困った」

リチャード「困っては・・・ない。だけど・・・」

ビリー「黒人との子供だからね。リチャードは好きにして」

リチャード「・・・」

ビリー「あたしはどうしても産みたい」

リチャード「・・・」

ビリー「……」

リチャード「ビリー、……僕は、子供の頃からずっと、黒人を差別してきた」

ビリー「……え」

リチャード「でも、今は違う。ビリーと出会って、僕は変わった。白人とか黒人なんて関係ない……周りが認めなくてもそれでも……子供が出来たことはうれしい」

ビリー「ありがとう」

リチャード「結婚しよう」

ビリー「……うん」

2人ハグ

リチャード「……」。聞いてくれ、実は、オフブロードウェイの上演が中止になった」

ビリー「上演中止」

リチャード「シバーナが評判が悪すぎるからだ。コンサートであそこまで発言したらまわりからは、危険人物としか見えない。それに、ブラックパワーって発言しているような連中と武装して……」

ビリー「ブラックパワーは、黒人の誇りを取り戻させていうことで……」

リチャード「誇りを取り戻すのに、武器をもつのか」

ビリー「暴力で押しつけてきているのは白人でしょ。あたしたちは、ずっと、気を抜けば殺されるってそうやって生きてる。選挙権が叶っても何もかわらない……」

皆、白人に対して、もう我慢できないの」

リチャード「それをビリーは変えたいんだろ」

ビリー「……。スニックはもうバラバラ……若い子たちも、シバーナもコニーも黒

人だけの州をつくるのかいいだしてる」

リチャード「実は、シバーナは、kkkとFBIに目をつけられてる」

ビリー「FBI……」

リチャード「このままだと、命も危険だ」

ビリー出ていく

リチャード「ビリー」

リチャード、出ていく

アンディ、雑誌を読んでいる。溜息、考え込む、電話をする

アンディ「アンディ・ストラウドです。お世話様です。フィラデルフィアにおります。はいーもちろん、シバーナには、一言も発言させません。・・・キャンセルですか・・・もう一度お考え下さい。もう一度ご検討ください！・・・切りやがった！このくそー！」

シバーナが入ってきてきて酒を飲む。アンディは酒を取り上げる

アンディ「このくそが！ベトナムの話をするなどといったはずだ！」

シバーナ「この戦争がいかに無意味かを話して何が悪いの・・・」

アンディ「いいか、ストラウド社で働いている38人を露頭に迷わせる気か・・・酒は飲むな」

シバーナ「返してよ。ヨーロッパツアーから、休みがなくて疲れてへとへとなの、安くてもなんでもかんでも仕事受けて、この後が、ラスヴェガスだなんて無理、あんなところいかない」

アンディ「いかないだと誰のせいだ、お前がスターのレールからはずれたからだろう」
シバーナ「スターなんてどうでもいい、政治的な音楽をやることは私の使命なの、くだらない音楽なんか・・・」

アンディ「くだらない・・・お前は、俺がいなけりや、今ごろ安い酒場で薬中にでもなつて野垂れ死にだー世の中は・・・」

シバーナ「そう、素晴らしいミュージシャンは、薬中になって死んでいく、黒人は特によ、ハーレムの黒人ミュージシャンを潰すために、薬をながしたの、ベトナムも同じ・・・白人こそが悪魔なの・・・」

アンディ「くだらんでつちあげばかり聞いて影響うけやがってこのくそが！お前のせいで、今あるのは借金だけだ俺が仕事をとつても無駄だ！そのくそ衣装も着替えるーこれよめ！（雑誌）」

シバーナ「シバーナは過激派の運動家グループと共に貯水池に毒をまいて白人を殺そうと計画している。運動家と姦淫をしまくる・・・こんな今さら何？」

アンディ「今までとは違う・・・自宅にも、車にも、ホテルに盗聴器がしかけられていやがった。お前が糞みたいな発言ばかりしてるからだ。いいか、今後、一切、何も発言をするな。歌ったら、すぐに檻に戻れ、すぐにだ！もし、余計な事を一言でも言ったら叩きのめすぞ、この猿女！帰り支度しとけ！」

アンディ出ていく

ビリー、リチャードくる

ビリー「シバーナ」

シバーナ「ビリー、最近集会にもこないし・・・」

ビリー「あんた・・・白い悪魔を亡ぼすって、あの発言は何なの？」

シバーナ「そのままよ」

ビリー「あんたは有名人なんだよ、影響力があるの。あんなこと言って、同胞たちに暴動を起こさせる気」

シバーナ「白人にやられても非暴力なんて言ってるからあいつらがつけあがるの、まだ分からないの」

ビリー「あんたがやりたかったことは、音楽のはずよ」

シバーナ「そうよ、私の音楽は武器よ、拳銃と同じ」

ビリー「シバーナ、聞いて。あんたは今、狙われているの」

シバーナ「そんなの前からよ」

リチャード「それとは別だ、**BO**が、君たち過激な運動家に対して、マルクス・レーニン主義の教えを仕込まれた、アメリカにとって狂気な存在だと大体的に新聞で発言している」

シバーナ「それが何」

アンディくる

リチャード「FBIの危険人物のリストにシバーナの名前が入っているんだ」

アンディ「なんで、そんな事をあなたが知ってるんですか」

リチャード「ストラウドさん、シバーナの身の安全を考えてしばらくは表には・・・」

☆シバーナ「関係ない、私は死んだって」

ビリー「何いってんの」

シバーナ「そんな事、承知で今までやってきたでしょ。そんなに命が惜しいの？」

ビリー「私は生きる為にたたってきた。あんたにも同胞にも・・・」

シバーナ「白人はここから出ていって」

ビリー「リチャードは仲間でしょ」

シバーナ「こいつに何言われたのよ。あんたが言ったんでしょ、ブラックパワーはどうしたの」

ビリー「今のあんたのやり方は戦争にしかならない」

コニーがくる、リチャードをみつけると殴りかかる

コニー「このくそやろうー！」

ビリー「なにすんのよ」

ビリーとアンデイが止めるがなくなる

アンデイ「コニー！何やってんだ！」

コニー「こいつの父親はジョージ・フォレストだ、ジョージ・フォレストの息子なんだよ」

一同とまる

ビリー「あんた何言ってるの」

コニー「白人至上主義者である、元、アラバマの州知事ジョージフォレストの息子は、黒人の過激女性運動家と交際していた・・・」

シバーナ「どういうこと」

コニー「雑誌に載ってたんですよ。リチャード・フォレストと、ビリーさんのスクープが・・・」

ビリー「雑誌？その雑誌みせなよ」

コニー「キャロルが撃たれた時、電話しにいったよな、あの時、何してた？なんの電話だいつてみる」

ビリー「リチャードを疑うの？あんた、いい加減にしなよ」

シバーナ「スパイなの」

リチャード「違う」

シバーナ「証拠は」

リチャード「ない、でも違う」

コニー「じゃあなんで記事になってるんだ」

シバーナ「記事なんて、マスコミの連中がいうことなんて当てにならない」

コニー「・・・」

ビリー「大丈夫」

アンデイ「・・・私がジョージ・フォレスト州知事にご挨拶に行った時、早めに着いたんです。あなたが部屋を出るのを見ました」

全員「・・・」

アンデイ「私は、州知事にシバーナにだけは手を出さないでくれとお願いした。でもシバーナが狙われ、キャロルが撃たれたんで、調べたんです。あなたが情報を流していたんですね」

ビリー「・・・どうなのこたえて」

リチャード「・・・そうだ」

ビリー「初めて会った時は、それで私に近づいたの」

リチャード「そうだ、情報を得る為に利用しようとして近づいた」

ビリー「さっきの話は、うそだったの」

リチャード「・・・。簡単に騙されてくれてなんでも話してくるから・・・」

ビリーつかみかかる

ビリー「嘘なの」

リチャード「僕じゃ、どうにもできなかったんだ」

ビリー「・・・」

リチャード「・・・(ごめん)」

シバーナ「ふざけんな！」

アンデイ「お帰り下さい。二度と来ないでください」

リチャード去る、コニー追いかけようとするがアンデイに止められる

シバーナ「知っててなんで黙ってたの」

アンデイ「いいか、それ以上言ったらぶちのめすぞ、あの人と繋がってたからお前は好

き勝手できてたんだ」

シバーナ「そんな」

コニー「恥ずかしいよ！あいつに、自分の子供を流産させられてるんだぞ」

アンデイ「もういっぺんいつてみる」

コニー「・・・」

アンデイ「いいか、白人にだけは手を出すな。虐げられようとな、俺はお前達が生きてる方が大事だ」

コニー「あんなふうにマスコミに書かれたら、こっちがやらなくても、どうせあいつは裏切り者としてkkkに消されるだろ」

コニー、出ていく

ビリー、出ていこうとする

シバーナ「どこいくの、あいつが情報を流したおかげで同胞が何人死んだと思うの？」

ビリー「わかってる」

シバーナ「だったら・・・」

ビリー「私・・・子供がいるの」

シバーナ「は？何いってるの？あいつの？・・あんな奴の子供を産む気なの」

ビリー「子供には罪はない。あたしはこの子を産みたい」

シバーナ「本気で言ってるの」

ビリー「あなたの今の音楽はあんたじゃないみたい」

シバーナ「これが私の音楽なの」

ビリー、出ていく

シバーナ「・・・・私は闘う」

アンディ「このままでと本当にあぶないぞ」

シバーナ「虐げられるくらいなら死んだほうがましよ」

アンディ「どっちにしろ、アメリカでの仕事はもう無理だ」

シバーナ「アメリカでやらなきゃ意味がない」

アンディ「お前がどう言おうが、仕事は全てキャンセルになった」

シバーナ「ラスベガスは」

アンディ「さっきの電話で、ラスベガスの仕事もなくなった。お前の負けだ、FBIはそう甘くない」

シバーナ「まだ終わってないやらなきゃいけないの」

アンディ「もう、無理だ・・・・。シバーナ、俺は降る。勝手にしろ」

アンディが去り、シバーナは一人になる

コニー「その後、リチャードさんは、マスコミのインタビューで、自分はジョージフォレストの息子であり、kkkだ。ビリー・ハンズベリーに近づいたのは、情報をkkkに流す為だけだ」と発言した。その記事が載った次の日、自宅で銃殺された。やったのはkkkだ。

あの人は、死を覚悟して発言した。ビリーさんと子供は自分とは関係ないと言いたかったんだと思う。

ビリーさんも狙われて、あの日以来・・行方が分からなくなった。

シバーナは、親父が離れたことで、音楽業界から干された。

それでも運動をやり続けようとしていたけど、運動のリーダーたちは亡命するされるかでみんなバラバラになっていった。あの日から一年後（・・・・）」

コニーが話す最中、シバーナは、壁に貼られている、スニックの運動のチラシを破り、嗚咽（絶望）

シバーナ、放心している

【過去 1968年 シバーナの家】

ドアの叩く音

ビリーが入ってくる

しばらく、無言の会話

シバーナ「……」

ビリー「……」

シバーナ「……」

ビリー「久しぶり」

シバーナ「……何をしようと思わなかった……私は負けたの」

ビリー「……今、どうしてるの？」

シバーナ「……」

ビリー「歌はやってないの」

シバーナ「歌なんて……あんなにみんなの期待に応えて歌ってきたのに……みんな

私から離れていった」

ビリー「あたしは、あんたの歌に沢山救われた。ありがとう」

シバーナ「……」

ビリー「……見て」

シバーナ、赤ちゃんをみる

シバーナ「あの時の……」

ビリー「そう。(赤ちゃんに)この人はね、シバーナ、ママの友達よ」

シバーナ「……」

ビリー「笑ってる……(赤ちゃんに)嬉しいね。この子ね、よく笑うの」

シバーナ「……。抱っこしていい？」

ビリー「うん」

シバーナはサラを抱っこする

シバーナ「……。名前は」

ビリー「サラ」

サラが出てくる（サラ、シバーナとビリーのやり取りを見ている）

シバーナ「こんにちは。サラちゃん」

ビリー「この子には、自分のやりたい事をなんでもやって、幸せに笑っていてほしい」
シバーナ「うん」

ビリー「あかし、この子と明日、アメリカを出るの」

シバーナ「どこにいくの」

ビリー「フランス」

シバーナ「もしかして、まだ追われてるの」

ビリー「もうしつこくて」

シバーナ「大丈夫なの？」

ビリー「ひとつお願いしたい」

シバーナ「なに」

ビリー「教会で、一緒にこの子の祝福をしてほしいの」

シバーナ「うなずく」

教会の鐘の音

まぶしくかがやいている

メアリーが入ってくる。メアリーとシバーナハグ

メアリー「命の源である神様、あなたに感謝いたします。父と子と聖霊の御名により洗礼を授けます。お祈りささげましょう」

3人と赤ちゃんの姿が輝いている

【現在 1986年】

サラ「私の母はビリーさんだったんですね・・・」

コニー「うなずく」

サラ「私、覚えてないはずなのに・・・」

コニー「ビリーさんはフランスへ君とは行けなかった・・・途中で襲われた。君はビリー

ーさんに抱かれながら泣いていたらしい・・・守れなくて申し訳なかった」

サラ「・・・」

コニー「あの時代じゃなければ・・・ビリーさんとリチャードさんは一緒になれていた。

だけどね、名前も残っていないこういう人間たちのおかげで今がある。私はそれを忘れないでいきたいとおもっている」

サラ「はい」

コニー「サラさんはあの二人が残した希望だ、自分がやりたい事をなんでもチャレンジして幸せでいてほしい」

サラ「はい」

コニー「シバーナにとってもね」

サラ「……ありがとうございます」

【過去 1969年 コンサート会場】

拍手

シバーナ(66歳) ステージ最後

シバーナ「この最後の曲をもって引退します。……闘争によって失ったものが多すぎる。怒りからは何も生まれない。……私が毎日とても恋しくて仕方がないビリーの話をさせて。ビリーは、毎日のように私の声となり、たくさん夢にみる。私は、この曲を歌うたびに、ビリーとひとつになれるような気がする。この曲は、差別に対して何かを訴えたり叫んでるものじゃない、聞いて何かを感じてほしいの。とにかくたくさん愛を感じて下さい」

拍手

シバーナ(1986年)、最後のステージを思い出している。

【現在 1986年 サラが泊まっているニューヨークのホテル】

シバーナ(56歳)がいる。

サラがくる。

シバーナ「……」

サラ「ママ?どうしているの?」

シバーナ「おばあちゃんから電話もらった」

サラ「黙ってアメリカに来てごめんなさい」

シバーナ「オーディションは?」

サラ「落ちた」

シバーナ「そう」

サラ「全部聞いた」

シバーナ「黙っててごめんね」

サラ「(首振る)」

シバーナ「あなたの本当のお母さんが、最後に書いた台本よ」

シバーナ台本を渡す。サラ、読む

シバーナ「・・・もう一度頑張んなさい」

サラ「ありがとう、ママ」

シバーナ「・・・おいしい物でも食べていこうか、何が・・・」

サラ「ママはもう歌わないの?」

シバーナ「もう歌はやめたの」

サラは台本を読みあげる

サラ「この物語は、若い才能ある子供たちのものである。私達の子供たちに、そして才能ある同胞におくる。(ヒリー出てくる) 私の友人である愛するシバーナ。彼女と初めて会った時、彼女の音楽に私は息をのみ鳥肌がたつほど感動した・・・彼女はのような才能ある人が自由に表現できる社会を目指し私達は闘っているだ」

シバーナ「・・・」

サラ「ママの歌が聞きたい。もう一度歌って」

カーナギーホールの拍手が聞こえてくる。拍手の音にひびられシバーナは

ステージに行く

シバーナ歌う

young gifted black

なんて素晴らしい夢

to be young gifted black

心のまま生きろの

この世界には

a million boys and girls

希望に満ちてる

それが真実

you're young gifted and black

伝えたい この思い

あなたを待ってる

素晴らしい世界が

落ち込んだ時にも

真実をみつめて

今こそ

立ち上がれ

汚れない

to be young gifted and black

あなたの中の声

後ろ向いた日も

若さゆえの過ち

今日の日の喜びよ

誇り持って語るんだ

to be young gifted and black

奮い立て

愛のため

立ち上がれ

完

